

『オイディプース王』716(έν), 730(πρός)に関する一考察*

岡 道 男

I έν と πρός

『オイディプース王』(以下OT)の第2エピソードにおいてIokaste(以下Io.)はかつてLaios(以下La.)に下された神託をOidipus(以下Oi.)に語り、La.殺害について「噂によればあの方をあるときよその国の盗賊どもが三つに分かれた車道の中で(έν τριπλαῖς ἀμαξίτοῖς)殺しました」(715-716)と言う。これを聞いたOi.は「今その話を聞いて、なんと激しく、胸が騒ぎ心が揺さぶられることか」と叫ぶ。Io.は「どのような心配に驚いて、そのように言うのですか」と尋ね、これにOi.は「お前からこう聞いたと思ったが(ἔδοξ') — La.は三つに分かれた車道の(すぐ)傍で(πρός τριπλαῖς ἀμαξίτοῖς)殺されたと」(729-730)と答える。岩波版『ギリシア悲劇全集』3では私は「(すぐ)傍で(πρός)」を「あたりで」と意識した。

藤澤は多くの例証をあげて、ここのπρόςがすぐ上のένとは、意味は異なるものの、場所の指示自体に関する限り同じ機能を果たすと述べている(p.3ff.)。藤澤は、私の訳においてπρόςを「あたりで」と意識した点を取り上げ、ここから、私がπρόςを場所に関する「漠然とした、ぼかした表現」として理解したと推測している。しかし私はπρός自体をそのような「漠然とした表現」とは解釈していない。事実、他の個所(20, 1302 etc.)では私はこれを正確に場所を指示する語として訳出している。そして藤澤自身(p.4f.)もこのことを認めている。

問題の個所では私は前後の文脈を考慮に入れて「あたりで」という意識を試みた。私が注目したのは、Oi.がIo.の言うένではなくπρόςを用いている事実であって、πρόςという語自体ではない。藤澤は、ένもπρόςも場所を指示する語であるから、置き換えても大きな意味の相違はないと考えている。事実、藤澤(p.3, 6f.)はένとπρόςをそれぞれ「(三叉路)で」と「(三叉路)のところで」と訳し、問題の個所ではOi.がIo.の言うένをπρόςに置き換え、自分の不安の焦点そのものについて確認しようとしていると解釈する。すなわちένとπρόςは置き換えが可能であるという前提に立って議論を進めている。私は、藤澤があげている用例を見ても、この2つの語は置き換えができないと考える。先ずこの点を明ら

にしたい。

OT 1169「ああ恐怖の崖っぶちに立つ思いだ、言わねばならぬ私は(Oἶμοι, πρὸς αὐτῷ γ' εἰμί τῷ δεινῷ λέγειν)」について、藤澤は「語るも恐ろしいこと、まさにそこに私はいる」をこの個所の直訳としてあげる。確かに羊飼いの男は語るのも恐ろしいことをこれから語ろうとしている。しかしもしここにἐνを置くなれば「私は語るのも恐ろしいことの中にある、すなわち語るのも恐ろしいことを(すでに)経験しつつある」という、別の意味の文章となる。

藤澤は、Aias, 95「お前の剣を首尾よくアルゴス勢の血で染めたか(ἐβαψας ἔγχος εὖ πρὸς Ἀργείων στρατῷ:)」のπρὸςと、Aischylos, *Prometheus*, 862f.「花嫁(Danaosの娘たち)はそれぞれの夫の生命を奪うのだ、両刃の剣をそのほとばしる血に染めて(ἐν σφαγαῖσι βάψασα ξίφος)」のἐνとが場所の指示の点で同じ機能を果たすと言う。確かにどちらの語も場所を指示している。しかしこのことはこれらの語が置き換え可能であることを意味しない。(狂気の中で) Aiasが相手にするのは軍勢である。ここのπρὸςは、敵の軍勢に真正面から襲いかかり、(激しく抵抗する)相手に切りつけることを表す。これに対し、Danaosの娘たちに殺されるのは眠っている(あるいは殺されるとは思っていない)夫たちである。さらに肝腎な点は、Aischylosの個所ではσφαγαῖσιという語が使われていることである。この語は、夫たちがあたかも犠牲獣のように抵抗もなく殺されることを表す。相手が犠牲獣のように無抵抗であれば深々と剣を突き刺すことができる。従って当然 ἐν が使用される。Aiasの個所でも *Prometheus* の個所でも、ἐνまたはπρὸςで置き換えることはできない。

では *Trachiniai*, 371f.「またこのことを多くの人々がトラークース人の集まり(集合所)の真ん中のすぐ傍で(πρὸς μέσῃ Τραχινίων ἀγορᾷ)私と同じように聞いた」と、423f.「町の多くの人々の中で、トラークース人の集まりの真ん中で(ἐν μέσῃ Τραχινίων ἀγορᾷ)多くの衆がお前からこの話を聞いた」についてはどうか。ここでは一見πρὸςとἐνとは置き換えが可能であるように見える。しかし実際はそうではない。423f.では、知らせの者がLichasに「お前は彼女がEurytosの娘Ioleだとは言わなかったか」と尋ねるのに対し、Lichasが「どんな人たちの中でか(ποίοις ἐν ἀνθρώποις:)・・・誰がこんなことを私から直接聞いたとお前に証言できるのか」と反問する。ここでἐνが使われるのは、大勢にとり囲まれて(194f.)話をしていたLichas本人の観点から語られているからである。これに知らせの者は、Lichasが用いたἐνをそのまま繰り返す形で(これはこの種のやり取りの常套的手法である)「町の多くの者の中で、トラークース人の集まって

いる真ん中で(ἐν μέσῃ Τραχινίῳν ἀγορᾷ ...)と答える。ここではπρόςが使われることはありえない。一方371ffでは、知らせの者が大勢の集まっている場所(または集合所)のすぐ傍で話を聞いたことが語られる。主語は「(トラークース人の)多くの人々」であるが、「私と同じように(ὡσαύτως ἐμοί)」が文の最後(強調される個所)に置かれていることは、この言葉が知らせの者の観点から語られていることを示す。彼は牧場でLichasが多くの者を前に話していたとき、Heraklesがまもなく帰国することを聞いてこれを知らせるためにやってきた(188ff)。彼は大量が(すでに)集まっている場所の一番外側に立って聞いた(従っていち早く立ち去ることができた)のであるから、ここではἐνではなくπρόςが使用されている⁽¹⁾。場所の「真ん中」にいるのは勿論Lichasである。

OT 20f.の「Pallasの2つの神殿に(πρός τε Παλλάδος διπλοῖς ναοῖς)」についても同様である。ここでは嘆願者たちは神殿の入口(または階段)に取り纏っている。彼らは神殿の中に入り込んで嘆願しているのではないから、ἐνを使用することはできない。OT 180f.: πρὸς πέδῳ...κεῖταιは地面に密接して横たわることである。地面の「中に(ἐν)」横たわっているのではない。

Phaidros, 249Cについても同様である。藤澤(p.3f.)はこの個所を「なぜならば、彼の精神はつねにかのもの(イデア)のところに——神がまさにそこに身を置く(πρὸς...ὤν)ことによってこそ神的存在であるところの、かのもののところに——ある(πρὸς...ἐστίν)のだから」と訳している。しかしこの訳には省かれている個所がある。またπρὸς...ὤν, πρὸς...ἐστίνが「(そこ)に身を置く」と「(かのもののところ)にある」と、それぞれ異なった形で訳されている。一方岩波版『プラトン全集』5の藤澤訳を見ると「なぜならば、彼の精神は、力のかぎりをつくして記憶をよび起こしつつ、つねにかのもののところに——神がそこに身をおくことによって神としての性格をもちうるところの、そのかのもののところに——自分をおくのであるから」と訳し、πρὸς...ὤν, πρὸς...ἐστίνを(論文の訳とは異なり)いずれも「・・・に身を、自分をおく」としている。論文の訳で省かれている個所というのは「力のかぎりをつくして記憶をよび起こしつつ」という句である。藤澤は「力のかぎりをつくして(κατὰ δύναμιν)」を「記憶をよび起こしつつ(μνήμη)」にかけて訳していると取れるが、これはむしろπρὸς...ἐστίνを修飾していると思われる。例えばSchleiermacher-Kurzはこの句をπρὸς...ἐστίνにかけて訳している⁽²⁾。あるいはπρὸς...ἐστίνとμνήμηの両方にかかっているとも言える。すなわちここでは哲人の精神はできる限り(記憶の力を働かせながら)イデアのすぐ傍に(密着して)留まろうとすることを言っている。『全集』訳は

πρόςに含まれる「すぐ傍に（密着して）」という意味を汲んで、「・・・におく」と訳しているように私には思われる。ここでも、κατὰ δύναμινをπρός...έστινにかけて解釈するなら、このπρόςはένと置き換えることはできない。そのように解釈しない場合でも置き換えは無理であろう。

さらに藤澤は幾何学におけるπρός c.dat.の例として，αἱ πρὸς τῇ βάσει γωνίαι（底辺上の，底辺に接する角，Eukleides.1.5 al.）をあげている。しかしここでπρόςをένによって置き換えるなら，それこそ，藤澤の言うように「幾何学はできないだろう」（p.5）ということになる。

他にいくつかの例を見るなら，OC 9f.: θάκησιν ... ἢ πρὸς βεβήλοις ἢ πρὸς ἄλσεσιν（人が入れる場所のすぐ傍に，あるいは神聖な森のすぐ傍に座ること）は，よそ者(13: ξένοι)または嘆願者としてやってきたOi.がこれらの場所の縁に座ることをいう。Pindaros, *Pythia*, 1.87: πρὸς ἄκρονι は「金床に密接して置く」という意味である。Thukydides, 3.57: πρὸς ἱεροῖς ... ἀνατεθῆναι は奉納の戦利品を神殿（の壁）に懸けることを指す。Platon, *Phaidon*, 84C: πρὸς τῷ εἰρημένῳ λόγῳ ἦν は，語られたことに（心の中で）関わっている，すなわち語られたことについて考え込んでいることをいう。また *Politeia*, 8.567A: πρὸς τῷ καθ' ἡμέραν .. εἶναι はその日その日の仕事に関わっている（従事している）ことである。その日その日の仕事の中に(έν)あることではない。

以上に見たごとく，OTの問題の個所において πρὸς とέν を藤澤の言うような形で置き換えることは先ず不可能である。私は πρὸς とέν が使い分けられていることについて，その文脈を考慮に入れる必要性を指摘したが（岡，p.24），έν または πρὸς が使われるには，必ずと言ってよいほどその必然性がある。すなわち πρὸς が使われている個所ではέν は使えないし，έν が使われている個所では πρὸς は使えない。にも拘らず Oi. は Io. の言うένではなく πρὸς を用いている。すなわちこのένと πρὸς は，Io. の言う「三叉路で」を Oi. が「三叉路のところで」によって言い換えていること（藤澤 p.6f.）を表すとはどうてい考えられない。

ではなぜ Oi. は，Io. の言うένではなく πρὸς を用いたのか。もし彼が藤澤(p.7)の言うごとく自分の不安の焦点について確認しようとしているのであれば，Io. の使ったένを正確にそのまま繰り返す形で彼女から確認を求めるはずである。相手が使ったのとは別の言葉を使って確認を求めること——しかも，「中で」ではなく「（すぐ）傍で」というふうに，「中」から「傍」へ焦点をわざとずらす形で確認を求めることはおよそ考えられない。藤澤は，「こう聞いたと思

ったが(ἐδοξ')」(729)と言う Oi. の切り出し方は「πρός の使用とは何の関係もない」と主張する(p.13n.9). しかしこの切り出し方はまさに焦点を「中」から「傍」へずらすために用いられている. そもそも一つの文の中で一つ一つの語または表現が互いに「何の関係もない」ということはありえない. 「こう聞いたと思ったが」という切り出しで, Io. の言う ἐν ではなく πρὸς が用いられるのは, Oi. の激しい動揺を表すためと考えられる. この「. . . と思ったが」について, Jebb は, 悪夢を見た人間について言われる語であると注解している⁽³⁾. そこには, Io. が語った出来事が「車道の中で」ではなく「車道の(すぐ)傍で」起ったことであってほしい, すなわち自分とは関わりない出来事であってほしいという彼の偽らざる気持ちが混じっていると解される. 「(すぐ)傍で」は「中で」と同じことではないからである. 第一, 彼は心理的に動揺していない, あるいはその動揺を言葉の上に表していないというのは, 直前の「今その話を聞いて, なんと激しく, 胸が騒ぎ心が揺さぶられることか」(726f.)という言葉とそれに対する Io. の返答を無視することにほかならない.

ここで注意すべき点は, Oi. が Io. の言う ἐν τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςではなく πρὸς τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςと言うのに対し, 彼女が「そうです(γάρ), そのようなことが言われていました」(731)と答えることである. これは, ἐν τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςと πρὸς τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςとが同じ意味であると彼女が認めたことにはならない. Te. の言葉に対する Oi. の不安(恐れ)を取り除こうとしていた彼女は, もともと ἐν τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςというのは噂として(または報告者から)聞いたことであり, 彼女自身事件が ἐν τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςで起ったのかそれとも πρὸς τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςで起ったのか断定できないゆえに, 彼女の言葉に衝撃を受けている Oi. に対し, 彼の言う πρὸς τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςをそのまま受け入れる形で「そのようなことが言われていました」と答えるのである.

II ἐν と πέλας

Oi. は彼の大きな不安の理由について Io. に尋ねられ, 過去の事件の経緯を語る(771ff.). La. との遭遇について彼は, 「私は道を進んで, その(場所の)中で(ἐν οἷς)かの王が死んだとお前が言う, ちょうどその場所(τούσδε τοὺς χώρους)へやってきた」(798f.)と語る. 彼が Io. の言葉(715f.)を想起(引用)していることは「お前が言う(λέγει)」(799)から明らかである. そして Io. の言う ἐν に対し, すぐ後で「私が旅をしてあの三叉路の近くに(πέλας)きたとき, そこで私に. . . .

あの男が出会ったのだ」(800ff.)と言い直す。ἐν と言う Io. に対し、Oi. は πέλας と言うのであるから、716 の ἐν と 730 の πρὸς の場合と同様に、「中で」と「近くで(傍で)」の対置が認められることになる。すなわちこの ἐν と πέλας の対置は、716 の ἐν と 730 の πρὸς の対置に対応するとみなされる。とすれば Oi. はここでも事件の場所(三叉路)から少しでも距離をおきたいという自然な感情からこのように言っていることになるろう(岡 p.25ff.)。

丹下は、Oi. が Io. の言う「三叉路の中(ἐν)」を「三叉路の傍(πρὸς)」と言い換えることについて、「それは(恐れによる逃避を示すものではなく)むしろ Io. の誤りを訂正する(無意識のうちに)類のものであると思われる。なぜなら評者は 810 行の「三叉路の近くで πέλας」こそ、殺害場所の正確な表示であると信じるからである(cf.1399 στενωπός)」(p.102)という解釈を示している。

しかしエクソドスでは、Oi. は「おお三つの道よ、隠れた谷あいよ、茂みよ、三つの小道の中における狭い道よ(στενωπός ἐν τριπλαῖς ὁδοῖς)、お前たち(=関係代名詞 αἱ)は私の手から父の血を飲んだ(ἐπίετε)」(1398ff.)と言う。この文章(主文)の最初の語「三つの道(τρεῖς κέλευθοι)」は最後の「三つの小道の中における(ἐν τριπλαῖς ὁδοῖς)」に対応する。テキストのとおり読むならば「父の血」を飲むのは先ず「三つの道」であり、ついで「谷あい」、「茂み」、「三つの小道の中における狭い道」である。三つの道が「父の血」を飲んだ所は当然これらの道が一つに合流する所、すなわち三叉路(三叉点)である。三つの道がそれぞれ別々に「血」を飲むのではない。従ってより正確に「三つの小道の中における狭い道(三つの道の合流点)」と言い直される。そこは丁度「谷あい」で「茂み」がある。

もし丹下の主張するごとく事件が三叉路の中でなく三叉路の近くの(πέλας)狭い道(στενωπός)で起ったのであれば、Oi. は自分が知っている事実に基づいて「三つの小道の近くの(πέλας)狭い道よ」と言うはずである。ここで Oi. が「近く」ではなく「中(ἐν)」と言うことは、彼が La. を殺したのは記憶においても事実においても「三叉路の中」であって、「三叉路の近く(傍)」ではなかったということである。さらに彼の言う「三つの小道の中における(ἐν τριπλαῖς ὁδοῖς)」は、Io. が語った話の中のキーワード「三つの車道の中において(ἐν τριπλαῖς ἀμαξιτοῖς)」(716)に対応する。すなわち彼女は La. 殺害についてたんに報告(または噂)を聞いただけであるにせよ、殺害場所については正確に語っている。Oi. が自分の記憶にある「三叉路の中(ἐν)」の出来事に酷似する事件を Io. から聞いて衝撃を受けるのは当然である。

丹下は、「三叉路」という語自体を重視するところから「乱暴な言い方をすれば、付く前置詞はἐν でも πρὸς でもかまわない。副詞のπέλαςでもよい。問題は「三叉路」の一語である」(p.103)と言う。これは文字通り「乱暴な」議論である。上にあげたOι.の科白においても、Io.の語る話においても「中(ἐν)」と言われるのである。肝腎の語に付く前置詞（または副詞）を無視するならテキスト解釈は成り立たない。Aischylos, fr. 387a, Euripides, *Phoinissai*, 37f.等から見て、彼が父を三叉路の「中」で殺したという伝承が存在したことは疑いない。Sophoklesのいう三叉路の「中」はこの伝承に基づくものと考えられる。

さらに丹下は三叉路の中では「第3の道が退避路になるから」、すなわちどちらかが第3の道に退避できるから「衝突は起りえない」と断定する(p.102)。しかし両者とも最初から退避する（相手を避ける）意志がなければ、たとえ三叉路の中であろうと衝突は必至である（岡p.28）。Oι.が語る事件の話から見る限りどちらかが相手に譲ろうとした気配は微塵も認められない。逆に言えば、たとえ一本道であっても徒歩のOι.に退避する意志さえあれば道の脇（外れ）に寄るなり退避できるところまで引き返すなりして衝突を避けることができる。

「一本道でなら衝突は起る」(丹下p.103)とは限らない。実際、当時の人々はみな一本道を旅していたのである。平地の少ないギリシアではそれは当然「狭い道」である。しかし彼らは衝突ばかりしていたのでは決してない（岡p.28）。

1398行以下についてJebbは、先ず（1）高い所から見た情景として三つの道と谷あい、ついでOι.が降って行くに従い（2）茂み、（3）進んできた道が三叉路のすぐ手前で狭くなる所(στενωπός),（4）進んできた道が他の二つの道と合流する場所（すなわち三叉路）、という4つのことが描写されていると言う⁴¹。そして「733の注を見よ」としているが、これを見るとJebb自身はLa.殺害は当然のこととして上記の（4）で起ったこととして理解していることが分かる。いくつかの概念が並んであげられるこの種の文章（主文）において、もっとも重要な概念が文頭または文末、とくに文末にあげられるのはギリシア語の常識である。丹下の言うごとく（3）が肝腎の殺害現場であり、しかも（4）とは別の場所というのであれば、（3）と（4）は置き換えられるはずである。

Jebbの解釈は、στενωπόςをἐν τριπλαῖς ὁδοῖςとは別の場所としている。しかし私は、テキストが示すとおり「三つの小道の中における(ἐν)狭い道」が正しい解釈であると考え。三つの小道が出会う（合流する）ところがστενωπόςなのである(cf. Statius, *Thebais*, 1.64: trifidaeque in Phocidos arto). 道を進んでいる者の視点から見れば、自分の進んできた道（狭くなっている道）が他の二つの小

道に分かれる，まさにその狭い道の地点，すなわち三叉路（三叉点）ということである（岩波版『ギリシア悲劇全集』3では私は「狭い道が三つに分かれるところ」と訳した）。この三叉路においてOiがLa.の一行を殺してしまうほど恐ろしい争いが起ったのであるからそれは「狭い道」なのである。Jebbのいうポーキスの実際の地形⁽⁵⁾をここのOiの科白に読み込むべき理由は全くない。Jebbの解釈は実際の地形をテキストにこじ付けたものであり，ギリシア語原文の解釈としてきわめて不自然である。

Oiは最初に「三つの道」をあげ，これをより正確に「三つの小道の中における(ἐν)狭い道」と言い直す。「三つの道」がまさに出会うところ，すなわち三つの小道の「中」における狭い道こそ，父と息子が出会う運命の場であったからである。

注

* 藤澤令夫は論文「オイディプスは真実から逃れようとしたか？ — Sophocles OT. 730: πρὸς τριπλαῖς ἀμαξιτοῖςと関連して —」『西洋古典学研究』41, 1993, 1ff.（以下，藤澤）において，私が『オイディプース王』訳（『ギリシア悲劇全集』3，岩波書店，1990）において示したἐνとπρὸςに関する解釈を批判した。また私の論考「オイディプースと真実 — ソポクレーズ『オイディプース王』の劇構造を中心に —」『ギリシア悲劇とラテン文学』岩波書店，1995, 3ff.（以下，岡）を取り上げた丹下和彦の書評『西洋古典論集』15, 1998, 95ff.（以下，丹下）においても，ἐνとπρὸςをめぐる見解が示されている。私の『オイディプース王』解釈に関する両氏の批判の問題点については，「『オイディプース王』再考」『西洋古典学研究』(48, 2000, 1ff.)において取り上げることにし，本論ではἐνとπρὸςに絞って考察する。

(1) R.C. Jebb, *Sophocles, The Trachiniae*, Cambridge, 1955, ad 371.

(2) F. Schleiermacher - D. Kurz, *Platon, Werke* 5, Darmstadt, 1981, p.85.

(3) R.C. Jebb, *Sophocles, The Oedipus Tyrannus*, Cambridge, 1914, ad 727. Cf. R. D. Dawe, *Sophocles, Oedipus Rex*, Cambridge, 1982, ad 730 (The vaguer πρὸς suits the tone of ἔδοξ' ἀκούσαι).

(4) op.cit., ad 1398f.

(5) op.cit., ad 733.